

科学技術・学術審議会（第66回）総会（10月13日）における指摘  
（我が国の研究力強化に向けたエビデンス把握関連）

【越智委員】

- 上位大学の論文数は、ドイツとかイギリスに比べてほとんど同じか、それより勝る。中位以降の方がずっと下がってくる。ドイツは比較的にニアに下がってくるというところがあるのですが、調べてみたところ、運営費交付金と割と相関しているということが分かりましたので、一概にそれで中位とか下位の大学が少ないというようなことは言えないのではないかと思います。
- 科研費の採択率が30%ぐらいあるということで、科研費の申請、応募のための申請の書類を書いたり評価をしたりするのにかける時間というのは極めて大きいものがあると私は思います。従いまして、ある程度論文を書いている人には8割、9割出して自由に研究をやってもらうような仕組みで考えていった方がいいのではないかと考えております。
- ほかにも何件かあるのですが、特に私自身が思うのは、医師の裁量時間ですね。あれが規制をされてくると、これは研究に使える時間が全くなくなると思いますので、ここの部分は政府とやはり十分話し合いをしていただかないと、地方に出ていく医師の数も減る、そして研究の時間も減るといような今後二重苦になる、と思います。

【春日委員】

- 職務時間等については、年代を区切った調査をされて、その結果をお示しいただきましたが、制約として考えられることについても年代ごとに調査をされているのでしたら、その点についてもお伺いしたいと思います。
- 研究人材、研究時間、環境、資金でお聞きいただいていますけれども、給与についてもお聞きになっているとか国際比較をされているかについてもお伺いしたいと思います。
- 大変ショッキングな結果でした。

【栗原委員】

- 現在もそうですが、むしろ今後がますます悲観的になるような結果だったので、大変ショッキングでした。これを解決するためには、大学の中だけで解決できないのではないかと思いますので、他の機関なり、産業界なり、あるいは国際的に協力していく、協調していくことも考えなければならないと思います。

○その前の議論で世界に伍する大学の改革等々もありましたけれども、こういった改革が、今分析いただいた問題の解決にどう効果を発揮していくのか。改革や改善をばらばらに考えていくのではなく、もう少しまとまった視点で考えていかれると良いのではないかと思います。

#### 【高橋委員】

○いろんな国際比較のデータを頂いたのですけれども、その中で特に重点的に取り組んでいくものとそうではないものというのはきちんと認識を合わせるべきかなと思っておりまして、先ほど大学ファンドのお話でもありましたけれど、世界と伍する研究大学を目指すということなのですから、世界と伍することが最終目的ではないと思うんですね。もちろん目指すことによって結果的に達成できることはあると思うのですけれども、それによって、世界と伍することによって何を指すか。それによっては、独自のやり方で世界を突き抜ける場合もあると思うので、この指標は世界と肩を並べるべき、この指標は別に並べる必要はないときちんと冷静に認識していく必要があるかなと思いました。

#### 【勝委員】

○論文数の変化の実証分析があるのですけれども、やはりここで見ると、教員の数、それから博士課程の学生の数というのが非常に大きく影響しているということが分かるので、先ほどの3%の事業費の増大という話がありましたけれども、任期無し教員の採用増も是非考えて欲しいと思います。もちろん競争的資金というのは重要ですが、それで任期付きの教員を増やすというのではなくて、やはり腰を据えて研究ができるような、そういうポジションを是非増やすような政策対応をしていただきたい。

○共著の論文、これ日本はそれほど比率としては低くはないなというのが分かったのですけれども、特にヨーロッパの場合、フランスとかドイツとか非常に共著率高いですけれども、これやはり研究費が、EUの研究費が非常に莫大であるということも考えますと、国際共同研究費を増やすことも重要ですし、どの辺に共著率の目標値を置くかということについては、そうした状況も勘案していただければと思います。

#### 【濱口会長】

○同感の御意見いろいろ多いです。相当厳しい状況があり、日本の科学技術は待った無しの状態である。次回に先送りしたい。

／以上